

イラクの教訓、北朝鮮の核

日本防衛のあり方

江畑謙介



KK BESTSELLERS

イラクの教訓、北朝鮮の核

日本防衛のあり方

江畑謙介

KK BESTSELLERS

苏工业学院图书馆
藏书章

江畑謙介 Ebara Kensuke

一九四九年生まれ。上智大学大学院理工学研究科機械工学専攻。博士後期課程修了。一九八三―二〇〇一年、英国の防衛専門誌『ジェーンズ・ディフェンス・ウィークリー』通信員。九五年スウェーデンのストックホルム国際平和研究所(SIPRI)客員研究員。九九年より防衛調達審議会議員。二〇〇〇年より内閣官房情報セキュリティ専門調査会委員。二〇〇一年より経済産業省産業構造審議会安全保障貿易管理小委員会委員。著書に『最新・アメリカの軍事力』『日本の軍事システム』(講談社現代新書)『安全保障とは何か』(平凡社新書)『インフォメーション・ウォー』(東洋経済)『情報テロ』(日経BP社)『殺さない兵器』(光文社)『兵器と戦略』(朝日選書) [2015: 世界の紛争予測] (時事通信社) 『兵器の常識・非常識 上・下』 『これからの戦争・兵器・軍隊 上・下』 『21世紀の特殊部隊 上・下』 (以上、並木書房) 他、多数。

イラクの教訓、北朝鮮の核

日本防衛のあり方

二〇〇四年九月一三日 初版第一刷発行

著者 江畑謙介

© Ebara Kensuke 2004, Printed in Japan

発行者 栗原幹夫

発行所 KKベストセラーズ

〒一七〇―八四五七 東京都豊島区南大塚二二二九一七

電話: 〇三―五九七六―九一二(代)

振替: 〇〇―八〇―六一〇三〇八三

<http://www.kk-bestsellers.com/>

印刷所 錦明印刷

製本所 積信堂

ISBN4-584-18817-3 C0031

定価はカバーに表示してあります。

乱丁、落丁本がございましたらお取替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を複製、複写(コピー)することは法律で定められた場合を除き、著作権および出版権の侵害になりますので、その場合はあらかじめ小社宛に許諾を求めてください。

112
46
996

イラクの教訓、北朝鮮の核
日本防衛のあり方

カバー・帯／写真提供——防衛庁
ブックデザイン——セル・グラフィックス

はじめに

一九九一年に起こった「湾岸戦争」は、日本人の軍事に対する考え方を大きく変える契機になったといわれる。具体的に言えば、世界において、国際関係において、軍事が大きな役割を演じている現実に気付いたということであろう。この年は、二〇世紀最後の一〇年の始まりの年であり、情報技術、いわゆるITの爆発的な発達によって、一気に世界が結びつく時代の始まりであった。さらに、それまで四〇年間にわたって続いた冷戦の、一方の中心国家であったソ連邦が崩壊した年でもあった。そのような時代にもかかわらず、湾岸戦争によって軍事が世界において、国際政治において、重要な要素となつていくという現実を目を開かせられたのである。

実際、軍事は冷戦時代よりも、その後の現代の方が、もっと露骨な形でその存在を示すようになってきている。二一世紀に入ると直ぐに、人類はテロリズムという軍事力の本質である破壊力をルールのない形で使用する武力行使手段の跳梁に直面し、二〇〇三年には、再びイラクを巡って国家による大規模な武力行使が行なわれた。そしてその戦いは、それまでの一〇年間

におけるITの発達を背景として、一二年前の湾岸戦争とは大きく内容が異なるものとなった。少なくとも、イラクのフセイン政権の打倒を目指して攻撃を行なった米英豪連合軍の側はそうであつた。

これに対して、イラクは湾岸戦争当時どころか、一九八〇年代のイラン・イラク戦争当時と全く変わることはない戦いのやり方を回復し、当然の如く、あつけなく敗れ去つた。イラク軍の戦いのやり方は、実に第一次世界大戦当時と変わらなかつた。それでよいと思つていた。独裁政権は失敗を認めないし、情報を制限することで、自分の力を客観的に把握できなくなるからである。加えて、人間は過去の経験にとらわれがちで、それを超えた新しいやり方を始めるのは難しいという、人間固有の特性にも縛られてしまった。

同じ話は、同じように独裁政権である北朝鮮にも当てはまるだろう。北朝鮮軍は半世紀前の朝鮮戦争の教訓で装備し、同じ運用を行なうつもりのように見える。それが現代には通用しないということが、彼ら自身には見えていないから、自分の實力を見誤る可能性がある。それが怖い。だから独裁政権は地域の大きな不安定要因になる。

その政権が、核兵器という、全く対応の手段がない破壊手段を手に入れるなら、それはその地域の大変な懸念材料となろう。その核兵器を世界に輸出するなら、全世界にとって重大な脅

威になる。しかも、北朝鮮は弾道ミサイルという、現在はまだ有効な防衛手段がない核弾頭の運搬手段まで輸出している。

北朝鮮の軍事力は、幸い日本海を越えて来られる能力がないため、日本にとっては大した懸念とはならない。だが弾道ミサイルは別であるし、そこに核弾頭が搭載されるなら、大変な脅威となる。有事になれば核弾頭付きミサイルが頭上に降ってくる、だから、朝鮮半島で何かがあっても米軍の支援をしないようにすべきだと、北朝鮮の特殊部隊は日本国内で心理戦を展開するだろう。小さな爆弾を原子力発電所の近くで爆発させて見せるかもしれない。それによる日本国民の動揺を狙うものである。

ここに必要とされるのは、弾道ミサイルに核弾頭が装備されている場合とない場合の差、特殊作戦部隊に何ができないかといった、軍事に関する正確な知識である。それは行政の責任で、正しい知識を国民に提供しなければ、国民は情報の欠如から来る不安で動揺し、相手側の思う壺になる。

核弾頭付きの弾道ミサイルが大変な脅威であるのが事実なら、それに対する防衛手段を持たねばならない。そうでなければ、相手の武力による脅迫に、ただ膝を屈する以外に方法がなくなくなるからである。そのためには、難しい話まで知る必要はない、弾道ミサイル防衛とはどのようなもので、何ができて何ができないかの基本を正確に知り、対応策を考えておく必要がある。

そのような軍事的知識を持つことに對して、日本国民はこれまで、あまりに意圖的に背を向けて來なかつただろうか。そのために、国民大衆の無知を悪用するような形で、誤った情報が流されたりしている。これは国民個人から見れば、堪えられない、憤慨に価することであらう。そうされないためには、自分自身で正しい知識を得る必要がある。

民主主義とは、實にこの国民一人一人が主体的に考え、行動することに基礎がある。それは正しい知識が必要である。

第一章

はじめに 3

イラク戦争の総括 11

変わってきた戦争の概念 12

成功した技術重視のラムズフェルド戦略 14

戦略と戦術を変えたステルス技術 18

ミサイルと爆弾の命中精度を高めた衛星測位装置 23

空爆に革命的变化をもたらした衛星誘導爆弾 28

地上から目標の座標値を知る方法 32

あるべき情報が伝わっていなかった中国大使館誤爆事件 34

砂嵐でもイラク軍を捕捉し続けた無人偵察機 36

「軍事における革命」とネットワーク中心の戦い 39

効率のよい戦い 44

米軍と他の国のRMA化 48

圧倒的な米国の軍事力 53

唯一超大国の米国とどう付き合うか 58

フセイン後の青写真がなかった米国防総省 61

日独方式の幻想が崩れたイラクの「戦後」統治 64

戦争に負けたことがなかったイラク 68

第二章

北朝鮮の核兵器と弾道ミサイル

航空戦力の使い方を知らなかったイラク	70
倒されるとは思っていなかったフセイン政権	76
親衛隊創設で戦力を低下させた独裁政権	81
支配体制に幻想を抱いたフセイン大統領	86
北朝鮮とイラクの共通性	89
巨大な兵力、古い装備	92
まだ朝鮮戦争を戦っている北朝鮮軍	95
電子戦の重要性を分かていない北朝鮮軍	100
在韓米軍削減の裏にあるもの	103
日本への脅威は特殊部隊と弾道ミサイル	107
北朝鮮の大量破壊兵器問題	114
「特別な」存在の核兵器	116
北朝鮮、寧辺の核施設をめぐる疑惑	119
一触即発状態からの劇的展開	123
金日成主席の急逝と核の瀬戸際政策	126
二つの核爆発方式	131
ウランとプルトニウムの製造方法	137
ウラン濃縮を認めた北朝鮮	140
核兵器保有まで認めた北朝鮮	142
カタフィ大佐が暴露した核の開市場	145

第三章

浮かび上がった核の闇市場	150
リビアのウラン濃縮計画	156
イラクにも売り込まれていたパキスタンの核技術	160
北朝鮮のミサイルと交換された(?)核弾頭設計図	164
ミサイル闇市場と核兵器開発協力	168
北朝鮮が核実験をしない訳	173
核弾頭でこそ意味がある北朝鮮のミサイル	175
大衆を人質にする弾道ミサイル	180
米国の弾道ミサイル防衛計画	184
日本が導入する弾道ミサイル防衛システム	188
「費用対効果」ではないBMDシステムの導入	192
見過ごす訳にはいかない北朝鮮の核兵器保有	194
「外科手術的攻撃」では破壊できない北朝鮮の核施設	197
あり得ない米国からの全面攻撃	204
手段は外交的解決のみ	206
鍵となる中国のエネルギーと食糧供給	209
中・露共に望まない統一朝鮮の誕生	211
日本の選択肢	217
減少した国家間の衝突と増大した民族・宗教紛争	220
「国際貢献」に対応する人的な問題	224
軍事力の基本は抑止力	228

日本は国防予算で世界第二位	229
装備も、量も世界第一級	234
現代戦に対応できない日本の戦車	245
非実戦的な自衛隊	251
日本周辺諸国もみな非実戦的	258
国内向けでしかない自衛隊の多国籍軍「参加」説明	261
真価が問われる状況が悪化した場合の対応	265
非現実的な理由を生み出してきた反対論	268
反対のための曲解、嘘	270
「有事」が起きて初めて機能する有事法制	275
不十分な自衛隊の国際貢献能力	280
小さい補給艦、取り外させられた空中給油装置	283
少ない輸送機、乏しい長距離展開能力	288
避難民を踏み潰して進むしかなかった陸自の戦車	294
市街戦を想定していなかった専守防衛	299
五年間を空費した弾道ミサイル防衛	303
弾道ミサイルを保有することによる抑止力	306
既に存在する長射程弾道ミサイルの技術	310
自前で可能な高い命中精度と貫徹力	313
軍事的能力は外交の重要な要素	320
おわりに	325



[U.S.ARMY]

第一章

イラク戦争の総括

変わってきた戦争の概念

「イラク戦争の総括」と題しても、本書執筆時点（二〇〇四年中期）ではまだ「イラク戦争」には片が付いていない。サダム・フセイン政権は一年以上も前に倒されたが、その後、イラク国内では米英軍を中心とするおよそ三〇カ国の外国軍隊による治安維持、イラク復興支援活動に反発する武装勢力や、いわゆるテロリストが武力闘争、テロ攻撃を続け、非常に不安定な状態が続いているからである。つまり、イラクの「戦争」はまだ終わっていない。

実は、この戦争という概念が、最近（冷戦後）は大きく変わってきた。以前は、その国の政権を倒すとそれで終わりであった



冷戦後、戦争の概念は大きく変化し、負けた国や破綻した国を再建し、安定した政権と社会を作るところまでが戦争の1サイクルとなった。それにより軍隊の性格と機能も変化してきている。[US DoD]

ものが、倒された政權に代わる新たな（一般的には「民主的な」）政權を樹立し、戦争や前政權の悪政により破壊されたり整備が遅れたりしていた社会インフラを再建し、雇用を創出し、経済的安定を図り、繁栄への道筋を作ってやることまでが含まれるようになった。場合によっては、戦争（紛争）状態になる以前からまともな政權が存在していなかったため、まず治安の回復と社会の安定化を図り、並行して、しっかりした政權を作る事までも国際社会が手助けしてやらねばならない。このような世界の支援を必要とする「破綻国家」が少なくはない。二〇〇四年中期時点でおお不安定な状態が続いているアフガニスタンが一例であり、サハラ砂漠以南のアフリカ中央部の諸国にはそのような国がいくつも見られる。

イラクも治安維持とインフラの回復をしながら新たな（民主）政權を作らねばならないという状態にあるが、それをフセイン政權打倒の中心となった米国、特に軍事力行使の当事者であった米国防総省は想定していなかった。この点に関しては後述するが、イラク戦争、すなわちフセイン政權を倒して、その後に（当然、親米的な）民主政權を作るための政策（計画）がきわめて杜撰であった、あるいはまともな計画を殆ど持っていなかった。それがフセイン政權打倒後のイラクの大きな混乱を引き起こす原因になり、延いては全世界に対して多大な迷惑を与える結果となっている。

成功した技術重視のラムズフェルド戦略

しかし、ことフセイン政権の打倒、換言すればフセイン政権の⁴抛り所としていたイラクの軍事力を破壊し、首都を制圧して政権を打倒するという在来型の戦争方式において、米軍（及び共同作戦を行なった英、豪の軍隊）はきわめて見事な、あるいはこの「見事」という形容詞を使うのに抵抗を感じるなら、きわめて「効率のよい」戦いを行なったと言い換えることもできる。非常に少ない兵力で、短時間に、味方の損害を最小限に抑えて目的を達成した。これは米国が最も得意とする高度技術に立脚した戦いの方法であり、それはまたラムズフェルド国防長官が就任以来、積極的に進めてきた政策でもあった。少なくとも、フセイン政権打倒というフェーズ（段階）イラク攻撃開始の二〇〇三年三月二〇日から、同年五月一日にブッシュ大統領がイラク攻撃に参加して帰還した空母エイブラハム・リンカーンの艦上で、「イラクにおける主要な戦闘行為の終結宣言」を行なうまで）において、ラムズフェルド国防長官の方針は間違っていないかったし、大方の予想をはるかに超える効果的なものであった。

このラムズフェルド国防長官の政策（方針）とは、一九九〇年代に入って「爆発的」とも形容できるような進歩を遂げた情報技術（IT）を駆使する新しい形の軍隊なら、在来型軍隊に比べて大幅に少ない（人的）兵力と装備の量で、所要の目的を迅速に、そして味方の損害が少